

富で多岐にわたり、“精神”に関心をもつ様々な
 学問領域の研究者を刺激する労作と言えるだろ
 う。一読に値する。

(橋本 明)

[新曜社, 〒101-0051 東京都千代田区神田神保
 町3-9, TEL. 03(3264)4973, 2013年3月, A5判,
 520頁, 5,200円+税]

書籍紹介

Bay, Alexander R.: “Beriberi in Modern Japan: The Making of a National Disease” (ベイ『近代日本における脚気：国民病の形成』)

近代以前の脚気は、世界中のどこにでも見られる
 風土病であった。日本では平安時代の貴族や江
 戸時代には江戸を中心に頻発し、明治以後とくに
 大正期から戦前戦後にかけて多数の患者と死者を
 出す国民病となった。脚気の歴史研究において
 は、何よりも山下政三先生による脚気の歴史三部
 作（1983～1995）が特筆される。脚気がなぜ日
 本において蔓延し国民病となったのか、これは医
 療医学だけではなく広く社会と政治にも深い関わ
 りがある。この脚気の問題に米国の研究者が取り
 組み、英語の著作を発表したことはきわめて意義
 深いものを感じる。

著者のベイ氏は、米国カリフォルニア州の
 チャップマン大学の准教授で、日本の公衆衛生の

歴史に焦点を当てた研究をしている。2008–2009
 年に来日し調査研究を行っている。本書の内容は
 以下の通りである。

序論 帝国の医学、権力、言説

- 1 災厄の地理学：江戸と東京の脚気
- 2 実験室を中心に据える
- 3 脚気：帝国文化の疾患
- 4 帝国と国民病への道
- 5 ビタミンの科学と無知の形成
- 6 胚芽米論争：1930年代におけるビタミンの
 利用と科学

(坂井 建雄)

[University of Rochester Press, 2012, p. 230]

京都橋大学女性歴史文化研究所 編 『医療の社会史——生・老・病・死』

京都橋大学女性歴史文化研究所の研究プロジェ
 クトの成果のひとつであり、論文9本・コラム4
 本を収録している。同大学同研究所による『京都
 の女性史』同様、各著者の専門領域における最新

の研究成果を盛り込みつつもテーマについて（本
 書では医療の社会的展開）通史的に概観できるよ
 うに工夫されている点が有益である。